森鷗外の衛生思想と身体観

――「風呂嫌い」の挿話を手がかりに――

井内　美由起

はじめに

森鷗外が風呂に入らなかったことは彼の生きていた当時から有名だったらしく、周囲の人々の手記にもしばしば登場する逸話である。風呂に入らないことがそれほどまでに取り沙汰されるということは、それが当時の習慣に比してみても言及に値する独特の習慣であったことを意味する。しかし、なぜ風呂に入らなかったのかということになると、調べえた限り、確実な理由は示されていない。いくつかの説が流通しているが、いずれもどうして風呂に入らないのか直接に鷗外にきいた形跡はない。結果として、鷗外に関する研究で「鷗外の風呂嫌い」は一つの挿話として扱われるに留まっている。

しかし、鷗外の子供たちをはじめとして、親族による手記や回想類を改めて読み直していくうちに、鷗外が風呂に入らなかったことには何らかの明確な理由があるのではないかと考えるようになった。手記にのこされた鷗外の日常生活には、衣食住や性に関する行動に彼独特のものが見られる。それらの多くが鷗外の学んだ衛生学の知識に基づく行動であったことはよく知られるところであろう。「鷗外の風呂嫌い」もまた、衛生学の知識に基づく行動であったのではないか。手記を読み直す過程でこのような関心が持ち上がったのである。

そこで、この仮説を検証するために鷗外が学んだ時期の衛生学では沐浴についてどのようなことが言われていたか調べた。その結果、鷗外が衛生学を学んだドイツ留学時代――一八八四～一八八八年。十九世紀末である――、ヨーロッパの衛生学では沐浴について今とはおよそ異なる言説が形成されていたことが分かったのである。よって、本稿では沐浴の文化史や同時代の言説などを踏まえつつ、「鷗外の風呂嫌い」が衛生学の学理に基づく行動であった可能性を提示したい。

しかしまた、鷗外が衛生学者だからといって私的生活に於いて衛生学を実行に移さなければならない理由はどこにもないのであって、むしろ衛生学にあてはまらない習慣がある方が自然ではないか。あ

るいはまた、「鷗外の風呂嫌い」にはとくに理由がなかったということも、人間の日常の些細な習慣であるから十分に考えられるのではないか。このような疑問もまたもっともなことである。このような疑問に答え、本稿での仮説を立証するためには、鷗外にとって衛生学がどのような意味を持つ学問であったのか考える必要がある。そこで、先行する作家論を踏まえながら鷗外の衛生思想が彼の身体観に合致するものであった可能性を提示したい。

本稿で明らかにしたいのは、「鷗外の風呂嫌い」という、一見鷗外を理解するためにあまり役に立ちそうにもない挿話が、どのような意味を持ちうるかということである。この疑問に取り組むことによって、親族の手記が持つ意義を改めて問うことを本稿の目的としたい。

一、鷗外と沐浴

私の父が湯に入らぬ事は有名でこれは書生時代に浴場が不潔だからというので行かぬ習慣になったのであろうが、家に風呂があるようになってからもそうであった。朝起床してすぐと夕方役所から帰ってからと二回、狭い日本風の室を洗面所にしてそこには古びた鏡台と座るに足るだけの蓙と手拭掛とがあって、蓙の上にはどれも真鍮の金盥と湯沸と大形の口嗽ぎがあった。平常着の父はここにあぐらをかいてまず嗽をし次に湯を金盥にうつして上半身だけ肌をぬいでそれで全身を拭うのである。汚水はすべて皆わきにあるバケツに捨てる。この間に西洋剃刀で顔を剃る事もあるが終始手順がきまっていて一滴の水も蓙の外に滴さない。すべてが父の頭の中と同様に秩序整然としているのである。母がこれを「お茶の湯のよう」と評したのは正に適切である。つかう手拭は一つで顔をふくのも股の間を拭うのも同一である。「人が汚いというがおれのからだに汚い所はない」と父自身が書いている通りすこぶる自信の強い男であった。父はこの習慣のために水の不足な戦地などで他人のように困らなかったそうである。

右の引用は森於菟による「子規　緑雨　鷗外の垢」[1]という文章の一部分で、於菟がみた父・鷗外の垢について述べられている。於菟は「垢は人生に何の益をも与えぬように見える」と言い、言葉どおり、鷗外を理解するために全く役に立ちそうにない、沐浴という瑣末な習慣を無造作に、しかし詳細に記している。無造作に、というのは「何の益をも与えぬように見える」事柄に敢えて言及する意図に触れていないという点に於いてである。

しかし、この文章が於菟の『父親としての森鷗外』の冒頭におかれたのは必然であろう。於菟は息子である彼だけが知っている生身の人間としての鷗外の皮膚の垢について述べることで、流通する鷗外像から剥がれ落ちるかも知れぬ何者かを伝え残そうとしたのであ

る。剥がれ落ちた何者かは垢のように「何の益をも与えぬ」かもしれないが、あるいは後の研究に於いて役に立つこともあるかも知れないという意図なのではないか。「垢」即ち身体から剥がれ落ちた皮膚は『父親としての森鷗外』全体の性格を言い表す比喩であり、また、親族の手記というもののもつ性格を言い表す比喩であるとも言える。結果として、親族による手記は鷗外研究史上有効な価値をもつとされている。

また、「垢」という言葉から親族の手記のもつもう一つの性格を読みとることができる。

於菟は「何の益をも与えぬ」垢が大切にされる稀な例として、「英雄豪傑や巨匠や大学者」の手垢の付いた遺品が大切にされることを挙げている。彼等の垢が大切にされるのは、垢の源である彼等の身体が尊重されるためであるという。鷗外の場合も、文学館などで遺品が手垢の跡が消えぬよう綿の上に載せられ、ガラスケースに陳列されている光景を見ることができるが、それは、鷗外の身体が尊重されるためであると言えるだろうか。むしろ、垢を大切にする身ぶりの中に鷗外の身体を尊重するよう仕向ける意図があったのではないだろうか。

同種の身ぶりとして、全集に作家の肖像を戴くこと、作家の肉筆が珍重されることなどを挙げることができる。これらの身ぶりは近代文学に於いて「作者」という制度を形成するために大きな役割を果たした。つまり、これらの身ぶりは「作者」すなわち作品を生み出すひとつの虚構の身体を設定し、作品を読むことは「作者」という一人の人間を読み、理解することであるとする読みの型を形成することを助けたのである。この型の成立によって、読者は作品を読んで作家の人となりに思いを馳せるような思考を身につけたのだと言える。

鷗外の手垢の付いた遺品が公にされる背景には、以上のような読みの型の成立が考えられる。「垢」という身体にまつわる言葉が親族の手記のもつ性格を言い表す比喩として機能するためには、「作者」をひとつの身体として捉える思考の型が成立していなければならないからである。

作家の身体が作品に合わせて受容される形態は鷗外に於いて顕著であるように思われる。この傾向は、たとえばデスマスクや軍服姿の肖像がふんだんに挿し挟まれた書物によって確かめることができる。於菟自身十分意識していたように、鷗外の親族の手記がそのような人々の視線の延長上に読まれてきたことは間違いない。すなわち、沐浴のごとき私的な事柄が言説化されるのは、鷗外の身体が既に読まれるものとして存在することを示しており、親族の手記はそのような読みの型に応え、さらに強固なものにしていくことを助けたのである。

鷗外に関する研究に於いて親族の手記が引用される時、後者の意図が批判的に論じられるようになって既に久しい。沐浴のような些細な挿話であっても、それを記すという身ぶりそれ自体に虚構の鷗

外像を造り上げようとする意図が常に含まれていることを忘れてはならない。

しかし、たとえそうであったとしても、「鷗外の風呂嫌い」は既成の鷗外像に回収されない、どこか滑稽な面白みを持つエピソードとして手記の中にさし挿まれているとは言えないだろうか。「垢」すなわち身体から剥がれ落ちる皮膚は、虚構の鷗外像に回収しきれない挿話としての性質をよく言い表している。また、森潤三郎『鷗外森林太郎』[2]はこれを「餘録」に収めている。あるいは、鷗外の娘である森茉莉や小堀杏奴の手記は鷗外の公的生活にほとんど触れず、日常生活に於ける挿話の集積である点に於いてむしろ独自性を出している。そこで、この挿話からどのような鷗外像が見えてくるか考えてみたい。また、そこには鷗外の沐浴の理由を問うことで、盲目的に「作者」という制度に従うことを避け、親族の手記が持つ今日的な意義を示すという目論見があることも強調しておきたい。

鷗外はなぜ湯に入らなかったのか。於菟は「書生時代に浴場が不潔だからというので行かぬ習慣になったのであろう」と推測しているが、どうして湯に入らないのか、直接に鷗外にきいた形跡はない。杏奴もまた、「父は決して風呂に入らない。これはどう云ふ理由からか私は知らないが、一体がさう入浴好きでなかつたのと、戦地での習慣がさうさせたものらしい」と言い、なぜ湯に入らなかったのか知らないようである。[3]また、鷗外の周囲の一人として、佐藤春夫は「戦場ではこのとおりだから、それを習慣にして置かなければならないと云っていたとか」と伝えている。[4]

鷗外の沐浴法が戦地での習慣に基づくものだとする説は、これらの手記に共通している。これについて山田弘倫が『軍医森鷗外』[5]の中で次のように記している。

沙河冬営中は後方部隊までも燃料豊富ならず之が為将兵の沐浴も意の如くならず、被服、皮膚共に甚しく垢膩に染みた。先生も其例に洩れざりしこと、思ふ。これに就いて中館長三郎の追憶談がある。

日露戦役中休戦日（明治三十七年十一月）満州沙河の線に在る第二軍司令部に軍医部長たる先生を訪うた。洗身中と云ふに付き待合せたるに、直に出て来り、濡れたるハンカチーフと五合程の濁水とを指示して曰く、満州水乏しく軍隊皆な飲料をも節約す。勿論沐浴の余裕なく身体の汚垢に困しむ。吾先年独留学中隊付軍医として独軍人と起居を共にし、衛生勤務を見習ひたる時、彼等と同様余り入浴せず毎日少量の水を以て清拭し、身垢を除くことに熟せり為に今回出征以来用ひて困ることなし、其の五合水の汚濁は拭はれたる吾が身垢なり。ハンカチーフは拭用のものなりと、依て先生の皮膚を窺視するに恰も新入浴後の如し。大に嘆服せり。先生博達の資を以て在獨勤務中細事微事の究行に努め、今は出征軍中に自ら実行して範を示す。

右の引用で注目されるのが、鷗外がドイツ留学中隊付軍医としてドイツ軍人と生活を共にし、そこで独特の沐浴法を身につけたと語っている点である。また、森潤三郎が、鷗外が湯に入ることを止めたのは彼がヨーロッパに留学した後のことであると言っていることから、この沐浴法がヨーロッパでの習慣に倣ったものであることがある程度裏付けられる。[6] 於菟が書生時代に身につけた習慣のように言っているのは、おそらく彼の想像であろう。

鷗外が留学先でどのような沐浴を行っていたか、『独逸日記』[7]に少しの手がかりを見つけることができる。一八八四年一〇月二三日の日記に鷗外が下宿することになった部屋の設備や家具が紹介されているのだが、そこに「盥漱の器など備れり」という記述がある。「盥漱の器」とは手を洗い口をすすぐための器のことであるが、具体的にはどのような器で、どのようにそれを用いたのか。植田敏郎によると、これは盥とポットからなる「洗面器セット」である。[8] 当時は水道の設備が整っていなかったため、水は井戸などから人の手で運んだ。ポット一杯の水で歯を磨き、口をすすぎ、全身を洗う習慣であったという。使った水はバケツに捨てる。これらは於菟の手記に記された沐浴法とほぼ同じであることから、鷗外はドイツに於いて独特の沐浴法を身につけたと考えられる。また、伊藤發子「東伯林・森鷗外記念館訪問記」[9]には、鷗外が留学した当時、ドイツで一般に使用されていた洗面台の写真が掲載されている。ここにも戸棚の上に盥とポットが重ねて置かれているのが見える。

したがって、ここまでのこされた記述から鷗外の沐浴の特徴をまとめると次の如くである。鷗外が独特の沐浴法を身につけたのは留学時代、ドイツに於いてであり、その沐浴法は湯に入らず、全身を手拭で拭うというものである。そして、このように詳しい記述がのこっているにもかかわらず、どうしてこのような沐浴法を長年の習慣として実践していたのか、鷗外自身が明らかに語った形跡はない。一般には、鷗外は水の不足な戦地でも困らないために、普段の生活に於いてもこのような沐浴法を実践していたのであろうと言われている。

また、鷗外が湯に入らなかった理由として、渋川驍が『森鷗外作家と作品』[10]のなかで次のように述べている点が注目される。左に引用する。

彼は、永い間の習慣として、銭湯にも自宅の湯にも入らず、朝夕バケツ一杯の湯で体を拭いていた。戦地での習慣を適当と考えたものであろう。しかし、いくら丁寧に体を拭いても、入浴のように、体を清潔に保つことはできないにちがいない。それが積み重なっていって、体の新陳代謝を害するようになったのではないか。（中略）

このような、健康上の不用意はありながら、鷗外が、常に自分の生活を、意志的に強く律してゆこうとした人であることを見ないわけにはいかない。おそらく勤務で、一日の大半の時間

を奪われる彼は、残った時間を、できるだけ有効に生かそうと努めたにちがいない。バケツの湯で体を拭くにとどめたのも、入浴の時間に多く費やされるのを嫌ったのかもしれない。

渋川は鷗外の沐浴法を時間の節約と解釈している。本当の理由はここでも分からない。しかし少なくともここで言えることは、鷗外は温かい湯に浸かり、心身ともにくつろぐような時間を持たず、くつろぎ、休息するはずの入浴や睡眠の時間を削って執筆のために充てていたということである。

渋川が言うように、このような行動は今日の習慣に比較すると「健康上の不用意」と思われなくはない。しかしまた、おそらく今日ほどリラックスすることが心身の健康のために重要視されることはかつてなかったのであって、鷗外が入湯を廃したドイツ留学時代には異なる言説が形成されていたのではないか。ここで注意しておきたいのが、鷗外が衛生学を学ぶため、ドイツに留学したという点である。このことから、鷗外がなぜ留学以後入湯を廃したか、という問いは些細なことのように見えて実は奥深い問題を含んでいるように思われる。

小堀桂一郎によると、「当時のドイツといえば、まさしくここを舞台として、西洋医学がその近代医学への面目一新をなしとげようとする転換期に当たっていた」[11]という。鷗外が衛生学を学んだ当時のドイツでは、病いの原因を「細菌」であるとする細菌説が提示され、身体観に大きな変化をもたらした。「近代医学への面目一新」とは、具体的には社会的・文化的な意味づけによる病いの「治療」が、科学の分野に引き渡されたことを意味する。衛生学は病気の予防を主な目的とする学問であるため、このような変化と密接に関わっている。よって、鷗外がこの時期にドイツに於いて衛生学を学んだ、ということは彼の身体観を考える上で注意しておきたい点である。

二、ヨーロッパの沐浴と鷗外

それでは、鷗外が留学した当時のヨーロッパでは、沐浴についてどのようなことが言われていたか。ジョルジュ・ヴィガレロは十五世紀から十九世紀末までのヨーロッパに於ける沐浴について論じ、身体の文化史としてまとめている。ヴィガレロによると、十九世紀末の「清潔」観とは、「今日の清潔の直接の重要な先行形態」[12]であるという。「細菌」という目に見えないものが病気の原因とされたため、沐浴によって皮膚を洗い清めることが重視されるようになったのである。しかし、このような「清潔」観は今ではあまりにも自明のことになっているため、十九世紀末にどのような変化が起こったか理解するためには、それ以前に遡ってみる必要がある。よって、少々長くなるが、ヴィガレロの論を参照しながらヨーロッパに於ける沐浴の変遷を見ていきたい。

ヨーロッパでは入浴の習慣は十六世紀ごろに中断していた。入浴

は皮膚の毛穴を開いて、外部の有害な空気を身体に取り込んでしまうと考えられたからである。しかし身体を清潔にすることがなされなかったわけではなく、この時代の人々は下着を替えることによって汗を拭い、汚れを落とすことが出来ると考えた。このような習慣は十八世紀ごろまでは続いていたという。鷗外は『大發見』[13]のなかでヨーロッパ人の衛生習慣に触れ、次のように述べている。

汗を流す爲めに日本人は毎日湯に入る。歐羅巴人はシヤツに吸ひ込ませて、度々シヤツを着更へて、湯に入らずに済ます。ペツテンコオフエルは吾人の襦袢は吾人に代つて浴すと書いている。

「ペツテンコオフエル」は鷗外が師事した衛生学者である。右の引用から、鷗外が留学した当時に至ってもヨーロッパでは湯に入ることが習慣化していなかったことが分かる。

変化は十八世紀後半に起こったとされる。貴族に対抗する価値観として、ブルジョワジーが身体の健康を強調しはじめた時代には、衛生学者は冷水浴によって筋肉や皮膚を収縮させ、硬く逞しい身体を造ることができると考えたのである。ここでは入浴は身体を鍛えるための手段であった。十九世紀になって、沐浴は皮膚の垢を落とすための手段として現われるが、この習慣が定着するためには設備の面でも、人々の感覚の面でも大きな転換が行われるのを待たなくてはならなかったという。人々を説得し、皮膚を洗い清めるための沐浴を普及させるために、「細菌」による科学的説明が果たした役割は大きい。

また、入浴の習慣が一度途絶えていたヨーロッパでは、それがくつろぐための手段としては考えられにくかったことも読みとれる。ヴィガレロによると、十九世紀末には既に「身体を洗うことの快楽」が人々の感覚に徐々に浸透していたという。しかし、それは未だ「はっきりと口にされるようになったわけではない」。むしろ「水は身体を軟弱にするという昔のイメージにとらわれた」場合も多かったのである。転換期にはこのような矛盾する態度が見られるが、少なくともここで言えることは、この時代の人々にとって沐浴は必ずしも楽しみではなく、そのような感覚が定着する以前の段階として、科学的な証拠による「説得」が必要であったことである。そして、「人びとを説得する作戦」を主に担っていたのが、鷗外の学んだ衛生学であった。

ここまで十九世紀末のヨーロッパに於ける沐浴を辿ったが、こうして見てみると、鷗外の沐浴法が必ずしも「健康上の不用意」とばかりは言えず、むしろ当時の衛生学の学理に基づく習慣であった可能性も考えられるのではないか。つまり、鷗外は専ら病気の原因となる「細菌」を除去するという目的のための沐浴を実行していたのではないか。あるいはまた、温かい湯に入ってくつろぐことに対して、何らかの危険を感じていたことも考えられる。皮膚の毛穴や筋

肉が弛緩すると身体が弱くなるという考え方は、この時代にも残っていたからである。

鷗外は留学から戻った翌年に『陸軍衛生教程』[14]を出版している。石黒忠悳の序文によれば、鷗外の留学の成果を簡単にまとめたものである。この中に「沐浴」の項がある。次に一部を引用する。

希臘の神、ヘルクレスは温浴を発見すと古記に出でたり。以て希俗の温浴を取りしを見るべし。後、ローマに至りては府内に八百五十六浴場を建つるに至りしが中葉におよびて此業衰え今代、再び澡浴の論、轟々たるを見る。

浴法に雨灌（レーゲンドウッセ）、瀑灌（コムパクテドウッセ）、及び槽浴（ワンネンバード）の別あり。雨灌法を用ゆるときは一人を洗うに五乃至二十五里垤児の水を要し槽浴法を用ゆるときは百七十乃至三百里垤児の水を要す。瀑灌法は其間に在り。

兵浴は軍医ジュナル始めて之を馬塞港の兵舎に設く。概ね皆雨灌法を用ゆ。

病院等には槽浴の止むべからざるを見る。浴槽は木、金、陶、石、屑面土等の製あり。排水、溢水の両管を具ふ。

「今代、再び澡浴の論、轟々たるを見る」とあることから、鷗外が留学した時期のドイツは沐浴に対する考え方および習慣が変化しようとするまさにその時期に当たっていたことが確かめられる。

また、「雨灌」、「瀑灌」、「槽浴」の三通りの沐浴法が紹介されており、病院などでは「槽浴」が「止むべからざる」と書いていることから、鷗外は浴槽に浸かる入浴法が必ずしも優れているとは考えていなかったのではないか。あるいは水を大量に用いることから、軍隊に於いては非効率だと考えていたのかも知れない。しかし、『陸軍衛生教程』では総じてドイツの衛生法を簡略に紹介することに徹しており、鷗外がどの方法をどのような理由で優れていると考えていたかということは書かれていない。あるいはそこに、当時の衛生学が未だ入浴が身体に及ぼす影響について曖昧な立場をとっていたこと、そして鷗外もまた曖昧な立場をとっていたことを読みとることはできないだろうか。

よって、本稿での仮説は次のごとくである。鷗外は温かい湯に浸かり、心身ともにくつろぐような時間を持たず、くつろぎ、休息するはずの入浴や睡眠の時間を削って執筆のために充てていた。これらの行動は今日から見ると「健康上の不用意」のように思われる。しかし、鷗外が入浴を廃した十九世紀末、ヨーロッパの衛生学では今日のように入浴によってリラックスすることはそれほど重要視されておらず、皮膚の「細菌」を除去することが強調されていた。また、当時身体の緊張を解き、弛緩させることは逆に身体を弱くすると考えられた場合があった。これらの点から、鷗外の沐浴は「健康上の不用意」というよりはむしろ衛生学の学理に従った習慣であったのではないだろうか。

さらに、鷗外の沐浴法は当時の日本での習慣に比較してとりわけ独特のものであったことを付け加えておく必要がある。日本ではヨーロッパと違い、入浴の習慣に断絶はなかった。瀧澤利行によると、銭湯の発達などから、十八世紀末から十九世紀前半には庶民に活発な入浴の習慣が定着したという。[15] もっとも、この時代の人々は身体を清潔に保つため、というよりは、飲酒や喫煙と同じような一種の趣味として入浴した。銭湯は人々の交流の場であり、江戸を中心とする洗練された文化であった。

江戸期に発達した入浴の文化はヨーロッパのように大きな断絶を受けることなく、明治期に引き継がれた。もちろん明治期になると衛生思想が徐々に入浴の目的と習慣を変えていくのだが、人々は入浴を快楽とする感覚自体を失うことはなかったのであるから、そのような中にあって、鷗外の沐浴法はひどく奇妙なものに映ったであろう。また、於菟が記しているように、森家には湯殿があった。当時、自宅に浴槽を備えていない場合には銭湯に行くほか、行水など入湯しない方法もあったようだが、このように入浴の条件――感覚の面でも設備の面でも――が整ったなかにあって、敢えて入浴しないという態度には積極的な理由があったと考えるのが適当ではないか。

また、湯に入らず、手拭で皮膚を擦るという方法には皮膚に付いた「細菌」を除去する目的のほかに、身体を鍛えるという目的も含まれていたのではないかと思い当たる。鷗外が全身払拭式の沐浴法を身につけたのはドイツ留学時代であるが、それから少し後になって、日本では冷水浴と冷水摩擦が流行した。たとえば、一九〇七年（明治四〇）に玉利喜造『冷水浴の実験と学理』が出版されている。[16] それによると、冷水に浸した手拭で摩擦することによって皮膚を鍛え、血液の循環を活発にし、強壮な肉体を手に入れることができるという。森茉莉によると、鷗外が使う手拭いは、あまり強く擦るためにすぐ毛羽立ってしまったという。

鷗外は健康のために、衛生学の学理に従った沐浴を実践していたのではないか。しかし、未だ疑問がのこる。なぜなら、当時は「健康」な身体の価値やイメージが今日のように固定されてはいなかったからである。そこで次節では、本節を踏まえて鷗外の衛生思想と彼の身体観の関係性を論じていきたい。

三、鷗外の身体―社会イメージ

そもそも衛生思想とは何か。前節でそれが「細菌」の発見という科学に基礎を置いていることを述べたが、実際の生活に応用される時、それはあるものを「清潔」と「不潔」に二分し、「不潔」なものを避け、「清潔」を志向する態度になって表れる。「清潔／不潔」の境界と文化の関係について指摘したのはメアリ・ダグラスである。ダグラスは『汚穢と禁忌』[17]に於いてこの境界の果たしている機能を通観し、『象徴としての身体』[18]では皮膚感覚に介入する社会的制約につ

いて重要な指摘を行った。衛生思想と身体観の関係性について論じるため、ダグラスの理論を一度整理してみたい。

ダグラスによれば、「清潔／不潔」の境界線を引く行為は、その社会を維持するために必要な秩序を創出する行為である。またダグラスは、境界線を引く行為そのものが「清潔」と「不潔」を生み出すのであって、その逆ではないことも強調している。

しかし私たちは「清潔／不潔」を秩序という観念的なものとしてではなく、主に皮膚をとおして感覚的に受容している。鷗外の場合もそうであったに違いない。鷗外が衛生学者であったというだけでは、私的生活に於いてまで衛生学に基づいた習慣を実践していたことの説明にはならないのである。ダグラスの論に於いて最も注目に値するのは、なぜ「清潔／不潔」の境界が皮膚感覚に密接に結び付くのか、という疑問に答えている点であろう。彼女は人間の身体のイメージがその属する社会のイメージに一致していることを発見したのである。例を挙げると、外部からの攻撃の脅威にさらされている社会では脆弱な境界を守らねばならぬ、という社会に対するイメージが作られる。このような社会では人間の身体の境界としての皮膚や開口部の防備の機能が重視される反面、消化や排泄といった外部との連絡の機能は低く評価されがちであるという。

では、社会に対するイメージと身体に対するイメージは、どのように結び付くのか。ダグラスは個々の身体は個別の経験であると同時に社会的なものである、と論じている。人は身体の生理的経験をもとに社会に対する見方を形成し、また社会に対する見方が生理的経験を解釈する際の支えとなる、という交流と循環の図式が出来上がるのである。したがって、鷗外が当時の衛生学に基づいた沐浴を実践していたとするならば、そこには彼の持つ身体に対するイメージ、さらに社会に対するイメージを読み込むことが可能になるのではないか。

既に触れたように、皮膚の清潔を重視する一方、湯に入ることを避けるような沐浴が成立した背景には、ブルジョワジーが貴族に代わって社会的勢力を得たことが挙げられる。この時期のブルジョワジーにとって、親の世代から受け継いだ財産や文化的伝統を持たないこと、まさに「身ひとつで」成功したことは、もはや引け目を感じるようなことではなく、自己の能力の高さを示す証であった。貴族の文化が見せかけの美しさの裏に堕落と腐敗を隠し持つものとして否定される一方、禁欲によって自らを高めることへの憧れが人々の心を捉えたのである。

また、ジュリア・クセルゴンによると、細菌説が定着することによってブルジョワジーは労働者階級の不潔さに目を向けるようになったという。[19] なぜなら、自分たちがいくら清潔に気を配っても、不潔な人々の間で伝染病が流行すれば、いつ感染が飛び火するか分からないからである。衛生ははじめブルジョワジーが自らの身体を差異化するための思想だったが、ここに於いて労働者階級を支配するための思想へと発展する。そして、ピエール・ブルデューも論じた

ように、人は思想を身体をとおして実践することによって、社会に於ける自らの位置――階級や性別などによる支配／被支配の関係や住み分け――を把握するのである。

山崎一穎は森家の家風について、もともと武士よりは平民の血の方が濃く、武士とはいっても藩医であったことから、「生粋の武士でなかった」という意識が逆に「立身出世」の原動力になったと論じている。[20] また、鷗外は『半日』[21]に於いて次のように記している。

お父様が生きて入らつしやつて、おれの兄弟が内にゐた頃の事を考へて見ると、内ぢゆうで誰も死んだらどうの、金がどうのといふやうな事を考へてゐたものはないのだ。年寄は年の寄るのを忘れて、子供の事を思つてゐる。子供は勉強して、親を喜ばせるのを楽にしてゐる。金も何もありやあしない。心と腕とが財産なのだ。それで内ぢゆう揃つて、奮闘的生活をしてゐたのだ。

「心と腕とが財産なのだ」という一文は、自分の身体を資本として生き残ろうとするブルジョワジーの価値観を端的に表している。森家は典型的なブルジョワジーであった。そして、鷗外は自らの身体をブルジョワジーの価値観に適応させようとしていたのではないだろうか。

また、山崎正和は鷗外の「体質」として、徹底した合理主義と、味覚、聴覚、触覚、嗅覚などの「内部感覚」が非常に抑制されていることを挙げている。[22] そして、これらは鷗外が育った森家のあり方と連動していたのではないか、と論じている。

味覚、聴覚、触覚は視覚に比べ、その人にとって快いかどうかという身体化された趣味や好みの感覚によって左右されやすい。しかし、森家の人々がもともと持っていたであろうこれらの感覚に執着することは環境にそぐわない。山崎は好みの変質を地方から東京への地理的移動の面から説明している。同様に、貧しい典医から軍医総監への階層的移動の面からこれを説明することもできるだろう。上昇と発展を目指すブルジョワジーにとっては、もともと持っていた感覚を抑圧し、新しく参入する階級の好みに身体を嵌め込むことが必要であったからである。鷗外の健康志向とは、祖先から受け継がれた古い感覚を抑圧し、新しい環境に適応できるように訓練された身体イメージの別名なのである。訓練の過程で身体に無理がかかることもあっただろう。しかし鷗外はこうした身体の声に耳を傾けることなく、というより、身体の声に耳を傾けるような感性をもともと備えていなかったからこそ、学理を厳密に実践することができたと言える。

本節では、鷗外はなぜ私的生活に於いてまで衛生学の学理に基づいた習慣を実行していたのかという疑問に出発し、それが彼自身の身体―社会に対するイメージにぴったりと適合したからなのではないかという結論に達した。鷗外はドイツで学んだ衛生学の学理の上

でも、そしておそらく彼の身体に刻み込まれた価値観の上でも、この一見奇妙な沐浴法が最も「肌に合った」のである。

おわりに

茉莉や杏奴の手記によると、鷗外は子供たちの生活習慣についても、衛生学の学理に基づいた厳密な方法を実践させていた。ここで注目したいのは鷗外の衛生思想が子供たちの身体を通して実践されたということである。このような動作は習慣として繰り返されることによって熟練の度を加え、やがて「思想」は子供たちの身体に刻み込まれていく。事実杏奴の手記によると、子供の頃に仕込まれた習慣を手記を記した当時に至っても手放せないとある。なぜなら、「今では習慣になってしまってそうしないと気持が悪いような気がする」からである。[23]

子供たちは身体的訓練を通して鷗外の思想を受容し、さらに訓練は繰り返されることによって「そうしないと気持が悪い」と感じられるまでに「清潔」「不潔」の感覚に刻み込まれていく。このとき子供たちが継承したものとは何だったのだろうか。この疑問を追究することは、私たちの身体に刻み込まれた思想を見直すことにつながっているように思われる。なぜなら、既に触れたように、鷗外の「清潔」は「今日の清潔の直接の重要な先行形態」であるからである。

茉莉は一九六七年（昭和四二）に『気違ひマリア』[24]という文章を発表している。『気違ひマリア』は次のような書き出しで始まる。

マリアが父親の遺伝をうけたとしても、又母親の遺伝をうけたにしても、どこかに気違ひ的なところを持つてゐていい訳なのである。つまりふた親の悪い、変なところが遺伝したのである。（中略）父親の方は異つた清潔ずきで、入浴をしなかつた。（湯に入るのは、他人の垢を自分の体にくつつけに入るやうなものだ）と言ひ、湯を入れたバケツと、空のバケツとを並べておいて全身を拭いた。（中略）（おかあちやんは羽左衛門がいいなんぞといふが、花柳病の黴菌を体中につけてゐて、湯に入つてかみさんの分の黴菌をくつつけて上がつてくる羽左衛門より俺の方がよほど清潔だ）と言ふのである。（中略）母親の方ももとと清潔ずきだつたのが父親に同化してだんだん気違ひじみて来た。（中略）夏、食膳に蠅が一匹でもくると（あツ、蠅、蠅、蠅！）と叫んで青白く美しい掌を烈しく振つて払ひのける。

その母親の大騒ぎの叫び声が、マリアに遺伝したのである。マリアが目下住んでゐる白雲荘といふ建物の（中略）不潔さ、及びその住人たちの日本庶民的不潔さは恐るべきものであつて、白雲荘では毎日、真夜中或は四時頃になると、（中略）マリアのひそめた叫び声が起つて、混凝土の四囲の壁に谺することになつた。

少々引用が長くなったが、ここには鷗外から茉莉への衛生思想の受容の過程がほぼあますところなく記されている。鷗外の沐浴が専ら「黴菌」を除去するためのものであったこと、母・しげが鷗外の影響で極端とも言える「清潔」志向を身につけていったこと、そしてそのような父母の「清潔」志向が「マリア」に受け継がれたことが「遺伝」という言葉で端的に表されている。さらに、そのようにして受け継がれた「清潔」志向が『気違ひマリア』に於いて展開される「白雲荘」の住人に対する強烈な批判の糸口となっていることに注意したい。

『気違ひマリア』では、皮膚の清潔や不潔は「マリア」の強烈な階級意識の表れである。しかし、銭湯での体の洗い方をとおして、ブルジョワとしての「マリア」と文化的背景を持たない「もと市外族」との差異をアイロニックに描いたこの文章は、鷗外の「垢」を珍重する身ぶりを風刺しているとも読めるし、皮膚の清潔をいっそう追い求めることによって、自らを差異化しようとすることの滑稽さを突いているとも読めるのではないか。

鷗外の沐浴は今日から見ると、奇妙でいささか滑稽に思われなくもないが、その滑稽さは私たちがいくらかは自分のものとして持っているのではないか。近年では杏奴の遺品から文献資料をまとめた『鷗外の遺産』全三巻が刊行され、森家の私的生活をめぐる資料はますます膨大である。本稿では衛生思想の継承というひとつの側面から、これらをどのように読み解いていくかという問題に取り組んでみた。

注

(1) 森於菟『父親としての森鷗外』、一九六九・一二、筑摩書房。
(2) 森潤三郎『鷗外森林太郎』、一九四二・四、森北書店。
(3) 小堀杏奴『晩年の父』、一九三六・二、岩波書店。
(4) 佐藤春夫『作家の自伝12佐藤春夫』、一九九四・一〇、日本図書センター。
(5) 山田弘倫『軍医森鷗外』、一九九二・一〇、日本図書センター。
(6) 『鷗外森林太郎』（一九四二・四、森北書店）に、「歐洲から帰朝以來入湯を廢し、朝夕二回桶一杯の湯で頭の先から足まで拭ひ潔めるので、座敷の中でしても一畳敷の薄縁を敷いた外へは一滴も散らさないのを自慢にしてゐた」とある。
(7) 森林太郎『鷗外全集第三十五巻』、一九七五・一、岩波書店。
(8) 植田敏郎『森鷗外の独逸日記〈鷗外文学〉の淵』、一九九三・一、大日本図書。
(9) 伊藤發子「東伯林・森鷗外記念館訪問記」、『鷗外』、一九八七・一。
(10) 渋川驍『森鷗外作家と作品』、一九六四・八、筑摩書房。
(11) 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』、一九六九・一〇、東京大学出版会。
(12) ジョルジュ・ヴィガレロ、見市雅敏・高木勇夫・柿本昭人・川越修訳、『清潔（きれい）になる〈私〉』、一九九四・一二、国文館。
(13) 森林太郎『鷗外全集第四巻』、一九七二・二、岩波書店。
(14) 森林太郎『鷗外全集第二十八巻』、一九七四・二、岩波書店。原文は漢字片仮名混じり文で句読点なし。意味が取り易いよう一部表記を改めた。
(15) 瀧澤利行『健康文化論』、一九九八・二、大修館書店。
(16) 玉利喜造『冷水浴の実験と学理』、一九〇七・九、実業之日本社。
(17) メアリ・ダグラス、塚本利明訳、『汚穢と禁忌』、一九九五・二、思潮

社。

(18) メアリ・ダグラス、江河徹・塚本利明・木下卓訳、『象徴としての身体』、一九八三・八、紀伊國屋書店。

(19) ジュリア・クセルゴン、鹿島茂訳、『自由・平等・清潔』、一九九二・一、河出書房新社。

(20) 山崎一穎『森鷗外明治人の生き方』、二〇〇〇・三、筑摩書房。

(21) 森林太郎『鷗外全集第四巻』、一九七二・二、岩波書店。

(22) 山崎正和『鷗外闘う家長』、一九七二・一一、河出書房新社。

(23) 小堀杏奴『晩年の父』、一九三六・二、岩波書店。

(24) 森茉莉『森茉莉全集2』、一九九三・八、筑摩書房。